

北海道師範塾 「教師の道」 塾頭通信

第494号 平成25年2月15日

15年ぶり

警察庁の発表（速報値）によると、昨年1年間の自殺者数は対前年比9.4%（2885人）減の2万7766人と、15年ぶりに3万人を下回った事が明らかとなりました。

自殺者数については、1998年に3万人を超えて以来高止まりを続け、2003年には過去最悪の3万4427人を記録しています。その後、2006年に自殺対策基本法が成立した事を受け、国や地方公共団体では、自殺を防止する為の調査研究や医療体制の整備、自殺の危険性が高い人の早期発見、更には自殺防止に向けた活動をしている民間団体の支援などに取り組んできました。

自殺対策に取り組んでいるNPO法人ライフリンクの清水代表は「自殺は社会全体で取り組む問題との意識が広まり、対策が進み出したことが背景にある。特に都市部の対策が進んだ」と分析しています（1月17日付北海道新聞）。

そうはいつでも、2万7千人余りの人が自殺している現状は、依然として深刻です。

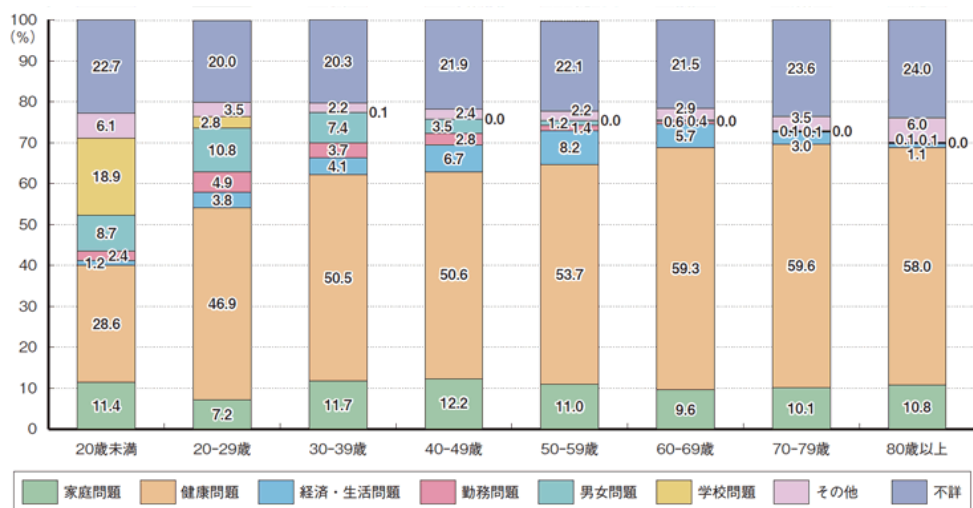
自殺者が急増したのは1997年に金融機関が相次いで破たんして以降の事ですので、経済的な問題が大きな影響を与えているように感じられますが、下表を見ても分かるように、年齢階層や男女の別によって自殺の原因、動機はさまざまです。

下表は、男性について年齢別の自殺の原因、動機を調べた（2009年～2011年の平均値）ものです。

これを見ると、男性の場合、全体としては「経済・生活問題」、「勤務問題」の占める割合が高いのですが、年齢別では、若年層は「学校問題」や「男女問題」、中年層は「経済・生活問題」、「勤務問題」、高齢期は「健康問題」の占める割合が高い事が分かります。

一方、女性については下表の通りですが、

女性は全年齢を通して「健康問題」の占める割合が高いという特徴があります。



資料：警察庁「自殺統計」より内閣府作成

このように、自殺の原因、動機は年齢階層や性別によって違いがありますので、自殺対策に当たっては、こうした点にも十分配慮し、きめ細かく対応して行く必要があります。

また、自殺者の傾向を見ると、40歳代以上の年齢層の自殺率は減少傾向にあるのに対して、20代、30代の若者達の自殺が増加傾向にあり、非常に心配です。

下表を見ると誰しも驚かれると思いますが、若者達の死亡原因の第1位が自殺というのは異常だと思います。

年齢階級	第1位	第2位	第3位
10～14	不慮の事故	悪性新生物	自殺
15～19	自殺	不慮の事故	悪性新生物
20～24	自殺	不慮の事故	悪性新生物
25～29	自殺	不慮の事故	悪性新生物
30～34	自殺	悪性新生物	不慮の事故
35～39	自殺	悪性新生物	心疾患
40～44	悪性新生物	自殺	心疾患
45～49	悪性新生物	自殺	心疾患
50～54	悪性新生物	心疾患	自殺
55～59	悪性新生物	心疾患	脳血管障害
60～64	悪性新生物	心疾患	脳血管障害

(平成24年度自殺対策白書から)

自殺するにはそれなりの理由があり、已むに已まれぬものがあるのだとは思いま

す。しかしそれにしても、若者たちは何故、かくも死にたがるのでしょうか。

人というものは、どんなに苦しい場面でも、何とか打開の道を探って生き延びようとするものだと思います。しかしそんな常識は、若者達には通じないという事かも知れません。

NPO法人ライフリンクの清水代表は「多くの若者にとって日本が、生きごたえのある社会ではなくなっている」と指摘しています（2月5日付読売新聞から）。

若者達の多くが今の世の中に魅力を感じていないというのは、今の世の中に執着していないという事でもあります。その原因は人によってさまざまだと思いますが、ただ、若者達から生きる意欲を削いでいるのは、実は我々が作り上げてきた社会にも原因があるとの指摘は重要です。

若者達の自殺を防止する為には、今後とも官民協働して相談体制をはじめ諸対策の充実に取り組む必要がありますが、同時に、国や自治体が、若者達が夢を持っていろんな生き方が選択できる社会の姿を描き、そこに向かって必要な条件を整備して行く事が不可欠だと思っています。（塾頭：吉田 洋一）